



令和4年度
第32回島根県雲南市

永井隆 平和賞

| 入 | 賞 | 作 | 品 | 集 |

島根県雲南市教育委員会

目次

Contents

小学生低学年の部

- 最優秀賞 みんなとなかよくしたいな
優秀賞 やさしくなりたいな
佳作 家ぞくっていいな

島根県・雲南市立掛合小学校
島根県・雲南市立鍋山小学校
島根県・雲南市立鍋山小学校

杉本梨々那
原優育
谷戸歩羽

小学生高学年の部

- 最優秀賞 今、自分にできること
優秀賞 永井隆先生に誓う平和
佳作 木次の桜と永井千本桜
佳作 けんかって、いいな

島根県・雲南市立鍋山小学校
東京都・目黒区立田道小学校
島根県・雲南市立木次小学校
島根県・雲南市立掛合小学校

小林綾花
黒木太陽
村尾和奏
須山灯里

中学生の部

- 最優秀賞 被爆者の苦しみを原点に
優秀賞 私の平和宣誓書
佳作 神風特攻から考えたこと
佳作 忘却
佳作 「平和のつくりかた」

広島県・盈進学園盈進中学校
沖縄県・糸満市立高嶺中学校
島根県・雲南市立加茂中学校
東京都・東京大学教育学部附属
中等教育学校
大阪府・大阪女学院中学校

日野由唯
濱元優愛
梶谷由奈
黒木大誠
菅野のこころ

高校生の部

最優秀賞 こちらは台湾放送局です

優秀賞 曾祖母と祖父が遺してくれたもの

佳作 隣人に向ける愛

佳作 平和への想い

島根県・島根県立松江北高等学校

島根県・島根県立三刀屋高等学校

島根県・島根県立平田高等学校

島根県・島根県立三刀屋高等学校

山本彩世

武田真奈

田中悠真

長崎帆乃花

一般の部

最優秀賞 平和の光

優秀賞 友だちと仲良くする意味

佳作 今、伝えよう

佳作 言葉の重み

埼玉県

島根県

広島県

福岡県

小松崎有美

名原志穂

三村祐子

三宅隆吉

最優秀賞

みんなとなかよくしたいな

島根県雲南市立掛合小学校二年

すぎもと りりな
杉本 梨々那

「きょう、けんかがあったが。」

先しゅうのかえりの会の時に、だれかが言った。わたしは、どきつとした。

それは、『心ぼかほかしゅう間』のことだった。『心ぼかほかしゅう間』とは、人を大切にするしゅう間だ。そこで、二年生は二つのせんげんをして、とりくんでいた。一つ目は、じぶんからすすんでえがおであいさつをすること。そして、二つ目は、おこったような声で言わないで、やさしい声で話して、なかよくすることだった。そのふりかえりの時のつぶやきだった。

その日、けんかをしたのは、わたしだった。みんなでおにごっこをしようとした時、

「おには一人がいい。」

とわたしが言うと、

「いや、おには二人の方がいいよね。」

と言う友だちと言い合いになった。おにの人数がなかなかきまらず、言い合っているうちに、とうとうチャイムがなった。みんなざんねんそうなかおで、教しつにかえったのだ。あそべなかったのは、わたしのせいだ。あやまらなくちゃと思っ

たけど、友だちがゆるしてくれるかしんぱいだったので、その時、なかなかあやまれなかった。すると、かえりの会で先生に、

「みんなとあそべなくて、ざんねんだったね。どうすればよかったかな。」

と言われた。わたしは家にかえってからも、ずっと気にかかって考えた。わたしからゆずればよかったかな。おにの人数なんて、一人でも二人でもどちらでもよかったのではないか。それよりも、みんなとなかよくあそぶほうがだいじだったのではないかなと考えた。

そして、つぎの日、ゆう気を出してじぶんから

「ごめんね。」

と言ったら、その友だちも

「いいよ。わたしもごめんね。」

と言ってくれたので、ほっとしてうれしくなった。そのつぎの日のおにごっこは、二年生みんなでできた。わたしの心は、なんだかほかほかした。

わたしは、『心ぼかほかしゅう間』はいいなと思った。これが、ながいはかせが言っておられた「によこあい人」のかなと思つた。じぶんの思いだけをおしとおさず、あい手やまわりの人の気もちを考えてみるのがだいじなんだとわかった。みんなとなかよくあそぶことができる、心ぼかほかになる。それがへいわってことかなと思う。

これからずっと、みんなとなかよくあそびたいと思う。

優秀賞

やさしくなりたいな

島根県雲南市立鍋山小学校一年

原 はら 優 ひ 育 なり

このまえのぜんこうしゅうかいで、こうちようせんせい
ながいたかしはかせのおはなしをされました。わたしは、
かせのことをはじめてしりました。はかせは、おいしやさん
で、せんそうのときに、たくさんひとをたすけました。で
も、はかせは、じぶんもびょうきだったそうです。わたしは、
びょうきなら、ちゃんとねておかないと、どんどんわるく
なってしんでしまうかもしれないのに、どうしてほかのひと
のことをたすけたのかふしぎでした。

きょうしつで、一ねんせいのみんなにきいてみました。み
んなは、

「じぶんもたいせつだけど、ほかのひともだいじだから。」

「けがをしたひとやこどもがかわいそうだから。」

といていました。わたしは、みんなのはなしをきいて、わ
たしもおなじきもちになりました。はかせは、ひとのやくに
たちたかったひとだったとおもいます。はかせは、やさしく
て、こころがつよいひとだとおもいます。

はかせのおかげで、たくさんひとがげんきになって、に
ほんがへいわになりました。だから、がいこくにも、ながい
はかせみたいなのひとがたくさんいたら、へいわになっていい
などおもいます。おんなのはかせやおとしよりのはかせやい
ろいろなはかせがいたらいいとおもいます。

わたしのおかあさんは、おこるとこわいけど、ほんとうは
やさしいです。いえでへびがでたときに、すぐにやつつけて
くれるから、つよいです。いつも、わたしのことをまもって
くれます。わたしは、おかあさんがだいすきです。

おかあさんは、かんごしをしています。おとなになったら、
わたしは、おかあさんといっしょに、ひとのびょうきをなお
すおいしやさんになりたいです。びょうきのひとに、

「だいじょうぶですか。」

と、やさしくいって、たくさんおはなしをきいてあげたいで
す。

ながいはかせみたいに、つよいところで、びょうきのひと
をまもって、なおしてあげたいです。

おかあさんといっしょに、たくさんひとをげんきにでき
るように、これからたくさんべんきょうしたいです。

佳作

家ぞくついでいな

島根県雲南市立鍋山小学校三年

谷戸歩羽
たに と ほの は

わたしはいつも家ぞくにささえてもらっています。

昨年しねんの七月十二日にずっと平和だと思っていた三刀屋町で、水みづがいききました。朝あさからずっと雨がふりつづき、学校の近くちかくの三刀屋川さんとういがわがあふれ、校庭けうていやプールぷールが水みづにつかりました。しばらくしてから、学校がっこうから帰かえることになり、お母おぼさんがむかえにきてくれました。家いへに着きくと、家の前いへまへの川がわもあふれており、近所ちかところの家いへや公民館くみんくわんが水みづびたしになっていました。わたしの家いへもどうなるかわからないじょうきょうだったので、すぐにじゅんぴをして、しんせきのおばさんの家にひなんしました。妹いもうとと兄あにさんは先まへに行いって、お父おとうさんはまだ仕事しごとから帰かえっていませんでした。とても心配しんぱいでこわくなりました。

何時間なんじかんかおばさんの家いへですごしていると、雨あめが止とんで、川がわも落ち着おちいてきたので、家いへに帰かえれることになりました。家いへに着きくとお父おとうさんが待まちってくれていて、

「おかえり。大じょうぶだった？」

とえがおで言いってくれました。わたしは

「うん、ただいま。大じょうぶだったよ。」

とえがおでかえしました。なんだかとてもあん心あんしんしました。家いへぞくみんなが同じおななじように声こゑをかけてくれて、あたたかい心こゝろになりました。

その後そののちに、兄妹けいまいでゲームげーむやトランプとらんぷをしましたが、そのとき妹いもうとが、

「楽しいし、うれしいね。」

と言いってくれて、すごくうれしかったです。家いへぞくがいつしよにいて、声こゑをかけてくれると、とてもよい気持ちきもちになります。

わたしはじめて自おん車くるまにちようせんしたときも同じおななじように感じかんじしました。なかなか上手うまくのることができず、すぐころんでしまいました。そのとき、お母おぼさんとお父おとうさんが、

「大じょうぶ？」

と何なん度も声こゑをかけてくれました。わたしの家いへぞくは、わたしができることできることやこまっこまっていることがあったり、つらいことがあつて暗くい顔かほをしていたりすると、すぐにあたたかい言葉ことばをかけてくれます。その言葉ことばがあるから、わたしはがんばることができています。

しかし、何でも家いへぞくにたよって、自分おのればかりが助たすけてもらうのは、いけないと思おもっています。自分でできることは自分おのれでどうにかしたいし、わたしも家いへぞくをささえてあげたいと思おもいます。妹いもうとが自おん車くるまのれん習れんじゆをするときには、わたしが教おしえたり、声こゑをかけたりしたいし、ほかの家いへぞくがこまっこまっていたり、暗くい顔かほをしていたりしたら

「大じょうぶ？」

と声こゑをかけてあげたいです。

わたしにとつて、家いへぞくは平和へいわそのものです。相手の気き持もちちを考かんがえて、一言いちごん声こゑをかけ合あえることができれば、もっと平和へいわでみんなが楽しい世界せかいになるのではないかと思おもいます。

最優秀賞

今、自分にできること

島根県雲南市立鍋山小学校六年

小林綾花
こばやしあやか

私には、明るくて、元気なおじいちゃんがいます。私はおじいちゃんが大好きです。

二年前、おじいちゃんのがんになりました。ステージ4での発見でした。お医者さんから聞いた時、おじいちゃんが死んでしまうかもしれないという恐怖でいっぱいになりました。

ある日、病院におじいちゃんのお見舞いに行くと、がんと治療の影響で、おじいちゃんはひどくやせ細り、骨の形が浮き出ていました。数分ごとに体調が悪くなり、その度にお医者さんをお呼びしました。苦しそうなおじいちゃん。そんなおじいちゃんに私は、

「きつと大丈夫だよ・・・。」

と、言葉をかけるのが精一杯でした。私の暗い顔を見て、おじいちゃんは、

「大丈夫。おじいちゃんは絶対死なないよ。」

と、笑顔で言ってくれました。

話すことさえ苦しい状態で、それでも私を安心させるために口にした言葉でした。私は泣きそうでした。悲しかったからではなく、自分が苦しい状況でも、私を心配してくれるおじいちゃんの温かさを感じたからです。

「ありがとうね。」

そう言って、その日は帰りました。

一週間後、手術の前日。病気が悪化して、体調が悪くなっ

てないことを祈りながら、おじいちゃんのお見舞いに向かいました。病室に入ると、一週間前はとても苦しそうだったおじいちゃんが、嬉しそうな笑顔でお医者さんと話していました。お医者さんが病室から出られた後、おじいちゃんに聞きました。

「何を話していたの。」

「明日は一緒に頑張りましょうね、とお医者さんが言ってくださったんだよ。」

「何で頑張らないといけないのに、あんなに笑顔だったの。」

「一緒に頑張りましょう、と言われて、心がつながった気持ちになったんだよ。」

私はおじいちゃんが一週間前に言ってくれた言葉を思い出しました。あの時、私は心が温かくなりました。今、おじいちゃんはお医者さんの言葉で心が温かくなったのです。

「明日、手術頑張ってね。」

そう言って、私は帰りました。

次の日、おばあちゃんから電話がありました。手術が成功したという連絡でした。お医者さんやおじいちゃんが、今できることを精一杯したからです。でも、おじいちゃんは、

「綾花のおかげでもあるんだよ。綾花が頑張ってと言ってくれたから頑張れたんだよ。」

おじいちゃんやお医者さん、そして、私。全員が今の自分にできることを精一杯しました。相手の心を温かくするため。だからこそ、手術が成功したのかもしれない。

相手の心を温かくするために、自分にできることをする。私の毎日の目標になりました。今ではすっかり元気なおじいちゃんへ。

「ありがとう。」

優秀賞

永井隆先生に誓う平和

東京都目黒区立田道小学校四年

黒木太陽

「戦争はおろかなことだ！戦争に勝ちも負けもない。あるのは滅びだけである！人間は戦争するために生まれたのではなかった！戦争はこりこりだ！平和を！永久平和を！」

〔花咲く丘〕より

ロシアがウクライナに侵攻した二週間後、長崎に住むひいおじいちゃんが101歳で亡くなった。大正、昭和、平成、令和、この四時代をきたひいおじいちゃんの人生の中で、一度も世界で戦争のない時代は、なかった。

「戦争はしたらいかん。」

ひいおじいちゃんは、いつもそう言っていた。だが、今、ウクライナでは戦争が起きている。

ウクライナだけではない。シリア、アフガニスタン、ウイグルなど世界中で人々が争い合い、傷つけ合っている。

ぼくは、それらのニュースを見るたびに、

「戦争は、とてもこわい。でも、なぜ大人は戦争をするんだらう。子どもには、けんかをするな、みんな仲良くしなさい、と言っているのに、平気で、罪もない人々を殺すなんて。」

と、いつも恐怖と、悲しい気持ちでいっぱいになっていた。そんなモヤモヤした気持ちを抱えたまま、ひいおじいちゃん

の法事のため、長崎へ行き、初めて永井隆先生を知った。それは、ぼくのなやみを知った両親が「如己堂」と「永井隆記念館」へ連れて行ってくれたからだ。

「ママ、見て見て見て。この言葉。ぼくが探していた答えは、これだよ。」

その答えとは、最初に記したあの言葉だ。原子爆弾という人類史上最悪の兵器で、多くの尊い命が失われた。白血病に侵され、原爆で負傷しながらも賢明に、人々を治療しつづけた永井先生。そして、死の間際まで、文章を書き、本として残してくれた永井先生。なぜ世界の戦争をしている大人たちは、過去の過ちを、学ばなかったのだろうか。

あの悲惨な戦争を二度と起こさないために、永井先生は、ぼくたち戦争を知らない世代に命がけで、書き残してくれた。先生の言葉には、平和な未来がある。ぼくたちが、その平和な未来を作るための礎となる言葉であふれている。

国連は、平和は維持するものだと言っているが、維持できていない今、ぼくは平和とは築くものだと思うている。

それは難しいことではないことを、永井先生から教わった。「互いに許し合い、互いに愛し合う。」

まさに如己の気持ちである。

世界は、今、核戦争の危機に陥っている。絶対、広島、長崎の悲劇をくり返してはならない。だから、平和な世界を築くために、ぼくは、永井先生の言葉を世界中に広めて、平和な世界を作る仲間を増やしたい。

「永井隆先生、ぼくは必ず先生が望んだ平和な世界を実現します。見守ってください。」

佳作

木次の桜と永井千本桜

島根県雲南市立木次小学校六年

村^{むら}尾^お和^わ奏^{かな}

私のふるさと木次町は、桜が有名です。コロナの影きょうで桜を見る人は減りましたが、それでも変わらず桜は力強く咲いてくれました。そんな桜の姿を見ると、私たちもどんな困難なことにも立ち向かう強い気持ちが大切だと思うのです。私は桜を大切に守っておられる方から、木次の桜は戦争を乗り越えてきた木であると聞いたことがあります。この木は、戦争で利用するために伐採の危機にありました。しかし、桜の世話をしていた子どもたちが戦争に行った時に、「たとえ魂となって帰ってきたとしても、自分の木が無くなっていたら悲しむだろう」と木次の人々によって守られてきたのだそうです。大変な時代を一緒に乗り越えた木次の桜は、人々の心の支えになっているのかもしれない。だから長い間、人々の手で大切に守られているのです。

私は長崎で、浦上天主堂にある「永井千本桜」を見たことがあります。この桜は、永井隆博士が原爆で焼け野原になった長崎に再び平和が訪れて、桜が満開に咲く土地になってほしいという願いをこめて植えられました。博士は病気で起き上がれなくなっても、平和を願いながら本を書き続け、そのお金で千二百本の桜の苗木を植えました。長崎の人々は博士

の平和に対する強い思いを引きついで、博士の桜を大切に育てています。原爆投下により荒野になった長崎で一生懸命に花を咲かせる老いた木の存在は、春に満開の桜が見られるということがどんなに幸せなことなのかを、私たちに教えてくれているようです。

今、誰もが終わることを願っているロシアとウクライナの戦争。たくさんの方が命を落とす戦争が世界で再び起きています。もし、博士が生きていたら何と言われるのでしょうか。残念ながら、博士が命をかけて願った、平和が続く世界ではなくなりました。緑豊かな土地は、灰色に荒れ果てました。けれども、私たちにとって、今戦争が起きているという実感はありません。しかし、この戦争は他人事ではなく、日本もいつ巻きこまれるかわからない状況です。「戦争絶対反対」とうたったえ続けた博士の言葉を、私たちは決して忘れてはいけません。今の平和なくらしを当たり前だと思わずに、博士のように、世界の平和をうたったえ続けることが大切だと思います。

博士は自分の命が短いことを知っていました。だから、博士の平和へのメッセージはたくさんの本として残され、桜の木となって、後の時代の人にも受けつがれています。博士はなぜ長崎に桜を植えたのでしょうか。もしかすると、ふるさととの美しい桜並木を思いうかべ、その風景を長崎に作りたかったのかもしれない。私は「永井千本桜」のことを知ったことで、木次の桜のことをますますほこりに思うようになりました。長崎とは遠く離れていても、「平和を」の願いは、桜によっていつまでもつながっています。

佳作

けんかって、いいな

島根県雲南市立掛合小学校五年

須山灯里

「けんかって、いいな。」

私はふと、そう思ったことがありました。

小学生くらいまで成長して、生まれてきてから一度もけんかをしていない人なんて多分いないと思います。

けんかは、結構ささいなことで起きます。例えば、「だれか私のお菓子食べたでしょ。」とか、「えん筆けずり返してよ。」とかです。実はこれは、私のきょうだいげんかのきっかけです。けんかするほど仲がいいと言いますが、正直、仲がいいとは言えないかもしれません。

この前は、妹の部屋がうるさくて声をかけたら、妹が怒ってけんかが始まりました。でも、後で落ち着いて考えてみると、私にとってはうるさい妹が、悪い。でも妹にとってはがまんしない私が、悪い。

けんかは、それぞれの正義と正義のぶつかり合いだと思います。自分にとって、相手は悪でも、相手にとっては正義だし、相手にとって自分は悪だと思われているからです。要するに、自分が正しいとばかり思っているときに、けんかは起こるのだと思います。

一人一人違う考えがあることをみんな知っているのにけん

かが起こるのは、自分にとっての正義に賛成してほしいからではないでしょうか。

そう考えると、私は、けんかがなくなるのはだめだと思うのです。それぞれの考えがぶつかるのがけんかだと思うので、けんかがなくなることは、自分の考えを伝えていないか、相手の考えを聞いていないかのどちらかなのだと思います。多くの人が、「けんかはない方がいい」と言いますが、私はその意見に反対です。

私は、お互いの考えをぶつけ合い、けんかをすることで新しい策や解決法を生み出せると思っています。

この前私は、家にある共同で使うダブレットを独り占めしているきょうだいに、

「私にも使わせてよ。」

と言うと、

「別にいいじゃん、そんな使わないんだし。」

と言い返されたので、

「私も使いたいから、お互いの使用時間を決めようよ。」

と提案しました。この時は、特にけんかをすることなく、お互いが納得して使うことができました。たくさんけんかをしてきたきょうだいだからこそ、お互いが納得することを提案できたのだと思います。けんかをしてきたおかげでいい解決策が生み出せたのです。

このときに私は、「けんかっていいな」と思いました。

人を傷つけるけんかをするわけではありません。みんなといい関係を築いていくためのけんか。お互いが納得する解決法が、そこには必ずあるはずです。

最優秀賞

被爆者の苦しみを原点に

広島県盈進学園盈進中学校三年

日野由唯

ロシアによるウクライナ侵攻が続いている。不安顔で避難する人や町が破壊されるニュースに接すると胸が張り裂けそうになる。

ロシアの大統領は、核攻撃の可能性にも言及した。それに呼応し、日本国内では「核共有」の主張も展開されている。かつて大惨事を起こしたチヨルノービリ（ロシア語でチェルノブイリ）原子力発電所をロシア軍が占拠したニュースには、福島第一原発の事故とも重なり、背筋が凍りついて、放射能がまき散らされないようにただただ祈った。核兵器での破壊は必ず、人類生存の危機につながる。放射能被害は、敵と味方に関係なく、非人道の悲劇を、世代を超えてもたらすだろう。戦争は死と憎悪を生み出すだけだ。ロシア兵にも家族があり、亡くなればその家族は悲しみに暮れるのだ。思いもかけないこのような状況は、私が仲間と行っている核廃絶の署名活動を全否定しているように思えて、私はしばらく無力感に襲われた。

しかし、この現実を許すわけにはいかない。そして、止めなければならぬ。そのために、自分たちにはできないことは何なのか……。だが、そう考えても答えは見つからない。でも、何か行動を起こさなければ、私はこの現実にも飲まれて、この戦争によって悲しむすべての人々に顔向けできないと思った。私は、焦る気持ちを抑えて、仲間といっしょに考え、また考えた。じっくり考える過程でこう思った。「これは、私たちの世界、私たちの暮らしの中で起こっていること。だから、答えはきつと、私たちの普段の生活の中にある」と。

そうして私は、尊敬する故・森瀧市郎先生のことばをよりどころにした。森瀧先生は、自身も被爆者で、世界の核実験に抗議し、広

島原爆慰霊碑の前で、仲間と座り込みを続けた。「核廃絶は被爆者の苦しみが原点。」この森瀧先生の哲学にしたがって、私は、仲間と、広島で被爆した切明千枝子さん（92歳）から丹念に体験を聞き、記録し、今こそその平和への願いを胸に刻むことに決めた。

小さな背中が印象的だった。笑顔が素敵な人である。軍国主義一色の教育を受けた切明さんが被爆したのは15歳の女学生のとき。彼女は、「あの日」をこう語った。あまりに重い証言だ。被爆者の苦しみは今も続いている。

「下級生が学校に帰って来た。でも、誰が誰かが分からない。みんな、顔が大きく腫れあがり、髪の毛はちりぢりに焼けて逆立っていた。制服もみんな焼けて、全身火傷。裸同然だった。みんな、手をこうして、前にあげて、帰って来たんですよ。手の指の先から、昆布かわかめを泥水に浸したような真つ黒い物がぶら下がってるの。ももの下も、皮膚がペロンと剥けて、それを引きずりながら帰って来たの。年配女性の有田先生がご自身の手で、下級生の傷の皮をちぎり、お捨てになったの。すると、下級生がこう言ったの。『先生、ありがとう。これでちゃんと歩けるようになりました』って。」

切明さんの声が少し小さくなった。「二人、また一人。『お母さん、痛いよ。熱いよ。』って、うめきながら、泣きながら、死んでいったのよ。それはもう、地獄でございました。」

そして最後に、こんなメッセージを私たちに語ってくれた。「平和は、じつと待っていて来ても来てはくれません。力を尽くして引き寄せ、つかみ取り、みんなで懸命に守らなと逃げてください。だからみんなで精一杯平和を守りましょうよ。戦争や核兵器で、あなたたち若者を死なせてなるものかかって思ってます。だから私は、あの日の地獄を語るのよ。」

私は、切明さんの愛を全身で感じ、勇気がわいて、その願いに応えたいと思った。そして、永井隆先生が、寝たきりになってもなお、如己堂で、平和への願いを書き綴ったのと同じように、私も未来のために、これからも被爆証言を丁寧記録し、記憶すると決意した。

優秀賞

私の平和宣誓書

沖縄県糸満市立高嶺中学校三年

濱 はま 元 もと 優 ゆう 愛 あ

テレビの画面に、目を疑うような光景。ロシアの複数の軍用車両が、ウクライナのキエフ市内を攻撃していた。建物は破壊され、街中を逃げ迷う住民。人々は負傷し、バラバラになった家族。我が子を捜す母親の姿は、痛ましい。私はとつさに「戦争だ。惨すぎる。」その映像は以前、祖母から聞いたまるで沖縄戦のようだった。七十七年前の沖縄戦が一気に、蘇った。この地球のどこかで、まだ戦争が起きている。私は強い衝撃を受けた。なぜ、人々は戦争という過ちを繰り返すのであろうか。

今から七十七年前、ここ沖縄はアメリカ軍が上陸し、沖縄県民を巻き込んだ地上戦が繰り広げられ戦場と化した。二十万人もの多くの命が奪われた。私の祖父母も沖縄戦の体験者である。私の祖父母は、沖縄戦終焉の地、糸満市の摩文仁で生まれ育った。沖縄戦当時、祖母が六歳、祖父が八歳。戦争が始まると、祖母は沖縄本島北部の山原と呼ばれる所へ、家族と避難した。逃げるために歩き続けた。弱音を吐くこともできず、泣きながら歩き続けた六歳の祖母。両足はむくみ、パンパンに膨れ上がった。ただただ生き延びることだけを考えて。アメリカ軍の攻撃から身を避けて、暗い山原の森を逃げ命を守り続けた祖母。戦争が長引き悪化し、激戦地となった摩文仁は、この世とは思えないほどの戦地。焼け野原。全てが焼失。暗黒。住民を含め、大勢の人が銃で撃たれ、死人があちこちに横たわっていた。人が人でなくなる、それが戦争。祖母は当時のことを目を閉じて、ゆっくりとそう話してくれた。今は亡き祖父。私は祖父から戦争の話聞いたことが一度もない。そこには祖父の壮絶な思いがあっ

た。当時九歳だった祖父。姉と川へ水汲みに行き、目の前で姉の頭に爆弾が投下された。祖父は川へ飛び込み無事だったが、姉の死を目のあたりにした祖父の気持ちは想像を絶する。祖父の思いは、ずっと閉ざされたままだった。そのことを私は、祖母から聞いた。祖母は八十三歳になるが、戦争の記憶をはつきりと覚えている。「戦争は絶対にしてはいけない。命こそ宝、命どう宝。」と強く言う。

六月二十三日、慰霊の日、私は祈りを捧げる。祖母の家の仏壇の位牌には、戦争で亡くなった人の名前が刻まれている。私の先祖。毎年、慰霊の日や旧盆には、私は祖母の家に行き、仏壇に両手を合わせて祈る。平和であることを祈る。

沖縄戦を体験した人々が高齢化している今日、私は平和の尊さを戦争の悲惨さを正しく伝える担い手になりたいと強く思うようになった。私は、糸満市の平和ガイドとして活動している。沖縄戦を体験した祖父母の話の正しく伝えたい。戦争の悲惨さ、平和の尊さ、生命の大切さ、命どう宝を広く大勢の人々に伝えたい。声を大にして、伝えていく使命が私にはあるのだ。

沖縄には、まだ戦争の爪痕が残っている。ここ糸満市は沖縄の激戦地で、多くの御霊が眠っている。そのため、現在も遺骨採集が行われている。そのような中、沖縄本島北部の名護市辺野古の埋め立て地に、糸満を含め南部の土砂を使用することが話題になっている。遺族の心情を察すると私は、憤りを感じずにはいられない。

梅雨が明け、強い太陽の日差しと青空が広がる沖縄。糸満市摩文仁近くの喜屋武では、青空の中、大輪のひまわりの花畑が広がっている。奇しくもひまわりの花は、ウクライナの国花だという。ここ糸満から平和を願い、平和を発信する。ウクライナに一日も早く平和が訪れますように。平和の尊さ、命こそ宝、命どう宝。あの太平洋戦争は何だったのか、沖縄戦はどんな意義があったのか、戦争という同じ過ちを二度と繰り返さないために、私は今、ここに平和を宣誓する。

佳作

神風特攻から考えたこと

島根県雲南市立加茂中学校一年

梶谷由奈

「神風特攻」。太平洋戦争で、多くの人々が犠牲になった日本軍の攻撃の名前です。特攻をした人というのは、国のために自らの命を投げ出す覚悟を持った、すごい人達だと思っっている人が多くいると思います。

しかし、ある本を読んでそうではない意見があることを知って、とても驚きました。神風特攻をした人達というのは、過激派組織のテロリストと同じだという意見があるのです。私は、(そんなわけない。)と思いました。でも、その意見に納得しそうにもなっていました。なぜなら、神風特攻をした人達と、テロリストの行き過ぎた自国への愛や、命を簡単に投げ出してしまふ心など、確かに共通点がたくさん見つかったからです。

だからといって私は、特攻をした人達がテロリストと同じだとは思いたくありません。日本の特攻は、相手の国から自分の国を守る正当防衛だと思うからです。テロリストのように何の攻撃もしてきていない無抵抗の国などに、勝手に攻撃を仕掛ける卑怯な攻撃ではないからです。

でも、また私は考えさせられました。「日本人を特別だと思っと思っていますか。」と書いてあったのです。(ああ、確かにそうだな。)と思っしました。そして、(特攻は本当に正当防衛だったのか。)(日本は卑怯な攻撃をしていなかったのだろうか。)と考えました。

特攻が行われていた太平洋戦争のころの話の聞いたことがあります。「日本でこんなにもたくさんの人々が亡くなりました。」「原爆で、たくさんの方が被害が出ました。」というふうに、日本の被害の話ばかり

だったように記憶しています。確かに日本は大きな被害を受けました。原爆は、何の罪もない多くの人の命を奪いました。それを落としたアメリカはとてもひどい国。そういうイメージが、まだ残っているから、日本が一方的にひどいことをされた弱い国という感じで見られているのだと思っしました。でも、それは日本にとつて都合が良すぎるのではないかと思っします。なぜなら、日本もアメリカに急に攻撃を仕掛けていて、そのせいで日本と同じように罪なき人がたくさん亡くなっているからです。こうやって改めて考えてみると、「日本人は特別」という考えは違うと思っしました。私たちの中で、日本のしたことが隠れてしまつて、原爆を落としたアメリカがすべて悪いことになってしまつていいると思っします。

アメリカの人たちだけが悪いなんて、そんなことはいらないと思っしています。戦争で苦しんだのは日本人もアメリカ人も同じだからです。日本は、原爆で多くの人を亡くして悲しみました。そして悲しんだ人の中には、神風特攻で家族や大切な人を亡くした人もいます。アメリカの人たちにとつても、命を懸けて突っ込んでくる日本の神風特攻をする人達の存在は精神的にとつてもつらかったと思っします。

戦争は、「やらなきゃやられる」そんな苦しい思いで戦わなくてはいけない、とても悲しいものです。大切な家族のために命を投げ出した人も少なくないでしょう。そして、日本の最後の攻撃手段である「神風特攻」。これは、日本を勝利に導くどころか、戦争に関わつた多くの人を悲しませるものになってしまつたのです。

私には、日本とアメリカどつちが悪いかなんてわかりません。どちもたくさんの方の被害が出て、多くの人が悲しんでいるからです。「どつちが悪いか」、この結論はきつと出ませんし、過去を変えることもできません。でも、この悲しい過去を繰り返さないことはできます。私たちは、太平洋戦争という出来事を忘れてはいけなないと思っします。何があつたのかを学び、一つ一つの命を大切に思っして、悲しい過去を繰り返さないように生きていけなないと思っしました。

佳作

忘却

東京都東京大学教育学部附属中等教育学校二年

黒木大誠

一九四五年、八月。この月の六日と九日に広島・長崎にそれぞれ原子爆弾が投下された。

この七十七年後。二〇二二年二月二十四日、ロシアがウクライナに侵攻した。どちらも悲惨な戦争である。戦争は、同じ種族の人間同士で殺し合う残虐極まりない行為だ。なぜ、多くの人の命、生活、大切な人を壊すこの極悪非道な自殺行為を人類はやめることができないのか。

それについての私なりの答えが、忘却である。たとえば、地震の予知は難しい。それは自然に起こるからだ。対して戦争はどうだ。自然に起こるか？いや、自然に起こるわけがない。人が起こすものである。それなのに人はそれも、自分たちと同じ「人」を殺すためにする戦争をコントロールできない。これにも忘却がかかわっていると。人の寿命を百年と仮定しよう。その間に世代交代をしていき、過去のこのような残虐な行為は忘れ去られ、歴史は風化の一端をたどる。歴史学者などの一部の人間の間でだけ真相が研究され、教科書で習う戦争はあなたも他人事のように描かれる。表面上の戦争反対という気持ちがある人々の中に流れ、世界が平和だと勘違いをし始める。平和が当たり前のものと慣れ、平和のありがたみを軽視するとあなたも戒めのように戦争はやってくる。まるでその無限ループだ。

大人は、子どもには「人を殺すことはよくないよ。」と教える。たしかに人を殺すことは犯罪だ。では、なぜ個人から国家になった途端に殺人は合法となり、たくさん殺すことは英雄視されるのか。そ

の理由が、それが戦争だから、という答えのほかにあるまい。たまたま今回のウクライナへの侵攻がニュースで取り上げられて有名になったが、世界では私たちが知ろうとしないだけで数多くの戦争が繰り返されている。リビア内戦、イエメン内戦、ガザ侵攻など、私たちが日本人がのほほんと平和に暮らしている今この瞬間にもこの世界には苦しんでいる人がいる。いったい日本人のどれほどの人が世界で起きている戦争、紛争の存在を意識しているのだろうか。戦争反対を訴えている人たちの中に戦争の実情を知っている人はどのくらいいるのだろうか？

今回、ウクライナへの侵攻で話題が持ちきりだった日本も、最初のころは各メディアそろってウクライナについて報道していたが、今となっては既にウクライナのニュースは縮小されている。人のうわさも七十五日というが、こういう歴史はたった七十五日で忘れてほしくないものだ。だが、実際問題、七十七年前の戦争はおろか、ほんの一年前まで続いていた戦争も知らない人が出てくる始末だ。世界中の情報がすぐに届き、個々の情報に一喜一憂する暇もなく情報の波にのまれていく現代。そんな中で忘れないようにしろというほうが難しい。時の流れと情報の流れというこの二つの残酷な流れには人は抗えないのかもしれない。

この悲惨な原爆、戦争の歴史を風化させず後世に伝え残し、戦争の愚かさを伝えるためにも永井隆博士の作品は一役買っていると思う。後の人間に、こんなことがあった、という原爆の恐ろしさを一人の人間として、一人の被爆者として、そして一人の医師として描いている。

これからは戦争について考える時、自分の知らない過去の戦争の歴史を紐解くため、この永井隆博士が残してくれたものをどう活用していくかが大切だ。過去の悲惨な歴史、過ちから目を背けるのではなく、しっかりと向き合って生きていくべきである。戦争によって人々の生活、命が脅かされる未来はもううんざりだ。平和な未来になるかどうかは私たちの手にかかっている。

佳作

「平和のつくりかた」

大阪府大阪女学院中学校三年

菅野 ころ

「今、平和になっているか。」

もし、永井隆さんに聞かれたら私はどう答えたらいいのだろうか。この真つ黒な世の中を見渡して何が言えるだろう。私は戦争を知らない。だから、本当の平和も実は知らない。日本って平和だと、テレビで海外の戦争の様子が映しだされるとつい思ってしまうが、でも、そもそも平和ってなんだろう。辞書でひいてみると『戦争やあらそいがなく、世の中がおだやかにおさまっていること。』とあった。

「ああ、全く違うな」

思わず声が出た。戦争は、毎日、この瞬間も起きている。戦争が始まってから全ての人がおだやかに思える日なんてあったのだろうか。対義語で『戦争』と書かれていた。こちらの方が今の私達には皮肉にもお似合いだった。ということは、戦争がない⇨平和なのだろうか。

修学旅行で長崎に行ったとき、平和記念公園などを歩きながらボランティアの方に説明してもらったことがある。説明を聞いていると、ズキズキと心が痛んだ。当時と同じ場所に立っていると思うと「助けてくれ」そんな声が聞こえた気がした。その方は私達に、今核兵器は何個だと思う？戦争を70年間程していない国は何か国？といった質問があったが、私は答えられなかった。知らなかったのだ。答えは、核兵器は一万八十個で国の数は八か国のみだった。核兵器は多すぎるが、戦争を最近していない国はあまりにも少なすぎて驚いた。

長崎市永井隆記念館では原爆によって妻を亡くし、自分もまた被爆による白血病と戦いながら死の直前まで原子病の研究と発表を続けた永井隆さんの美しい反面、悲しく儂い生き様が描かれていた。

永井隆さんの子供たちはどのような思いだったのだろうか。きっと私だったら父までも失ってしまう悲しみや何も出来ない虚しさ、理不尽な世の中に対する怒りをどこに、誰にぶつければいいのかわからなくてずっと泣いてしまうだろう。

平和記念公園内にある平和祈念像の前で最後にボランティアの方は、

「戦争ってなんだろう。本当の平和ってなんだろう。家に帰ったら感じたこと、思ったことをまずお家の人と話してみたい。そして、足を止めて本当に正しいのか、傷つく人はいないか振り返ってみてほしい。」

と仰った。実際にその場所を訪れたり永井隆さんの生き様を見たことで、戦争の悲惨さなどはもちろん学ぶことができたが、戦争がない⇨平和ということではないかと思つた。戦争が起ることで、自然は壊れ、命は軽々しく扱われ、恐怖や悲しみを心に植えつけてしまう。それは、戦争が終わったからといって、戻ることには決してない。

私には、何が出来るだろうか。どうやって平和をつくれればいいのだろうか。私達は、平和を求めるが、戦争を望む人達以上の努力はしていない。だから、まずは戦争などの真実を知る事につける。戦争なら知ってる、と思うかもしれないが、意外と知らない。実際に見て聞いて感じて初めて平和と愛を知ることができる。そして、自分の考えを持つだけでなく人に伝え、もつと多くの人の意見を聞くことが重要になってくる。また、それを世界中に伝えること。これを平和を望む一人一人ができたなら戦争なんてすぐに終わるだろう。しかし、今戦争を体験した人のほうが少なくなってきた。だから、今度は私達が平和のバトンを受け取り、走り出す番だ。もしかしたら戦争を望む人たちが強くて遠いところに今はいるかもしれない。だが、リレーでも今まで走ってきた仲間がいるからこそ頑張れる。もし、もう一度永井隆さんに

「今、平和になっているか。」

と聞かれたら、「平和になったよ。ありがとう。」と笑顔で伝えられる私になりたい。

最優秀賞

こちらは台湾放送局です

島根県立松江北高等学校三年

山^{やま}本^{もと}彩^{あや}世^せ

二週間前、おじいちゃんが亡くなった。死因は老衰。八十八歳だった。亡くなるまでの一年半、私たち家族はおじいちゃんと同居し、在宅介護をした。実際のお世話は母と祖母が行い、孫の私は時々おじいちゃんの話し相手をした。私が顔を見せるだけで、「おお、孫が来たわあ」と心底嬉しそうに笑ってくれるので、頻繁に会うようにしていた。

ある時、おじいちゃんは私に知らない話をしてくれた。

「わしは、こういつた話は好かんから、普段は話さないんだけど、やっぱり言わんといけんと思って、言うことにするわ」

かすれ声の前置きがあつてから始まった。

おじいちゃんは、日本の統治下にあつた台湾で生まれた。話のニュアンスからして小学生くらいまでだろうか、少年時代をそこで過ごし、日本本土へ引越したようだ。

「むこうの言葉は話せたはずなんだけれども、今はほとんど何にも覚えちよらん。『こちらは台湾放送局です（タイチーパイチーホンサンキョウ）と』『こんちくしょう（カンニンナウ）』だけだわ．．．学校ではな、台湾の子も、わしみたいな日本人もみんな仲良く遊んじよった」

私は外で元気に遊ぶ少年たちを想像した。台湾放送局のラジオ放送を聞き流し、「こんちくしょう」とふざけあいながら駆け回っている姿が目に見えん。

「でもなあ、あるとき急に台湾の友達が棒を持って追いかけてきたんだわ。昨日まで仲良く遊んじよったに。終戦の日の後だった」

おじいちゃんは、日本が負けたけんだわなあ、と呟いた。

私は驚いた。おじいちゃんが台湾で過ごしていたことと、日常会

話の欠片にもなっていないような台湾語しか覚えていないことは知っていた。だから、戦時中とはいえ、少年特有の楽しく騒がしい日々を送っていたとばかり思っていた。

おじいちゃんは続けた。悲しかったわ、そりゃあ悲しかったわ、と。「国がどうだの戦争がどうだの、子供がそんなことわかるわけないけんあ。大人が教えたか、大人がそうしちようのを見たかしたんだわなあ」

それっきりおじいちゃんは黙ってしまった。

私は友人の顔を思い浮かべた。昨日、わざわざ遠回りしてまで一緒に帰ってくれた友人を。テストの点が悪かったとぼやいていたら、茶化し、笑わせてくれた友人を。受験が終わったら遊ぼうと電話越しに約束してくれた友人を。彼等から嫌悪の目で見られ、存在自体を拒まれる状況を。

ありえない、と思った。あつてはならない。

どこかで読んだことのある戦争の話よりもずっと明確な恐怖が、私の心に広がった。

「だけん戦争はいけんのだわ」

少し経ってからおじいちゃんは続けた。

「国と国との争いが戦争。それだけじゃなく、人と人との争いもいけん。小さいところで言えば家族の中の争い、これもいけん」

おじいちゃんは、だけんわしとずっと仲良くして下さい、と隣にいる祖母に言った。祖母は「するわね」と笑った。

この会話の約半年後、七月四日、おじいちゃんは亡くなった。

持病の心臓病の悪化に伴って様々な臓器の働きが弱まっていたから、直接の死因を挙げれば足りがないのだろう。が、担当の先生は死亡診断書に「老衰」と書いて下さった。

「十分に長生きした」という意味を込めて下さったのだろう、と母は言った。

その日、おじいちゃんが寝ているリビングは確かに平和だった。戦争を知る人が一人いなくなったことも、また確かだった。

私は、おじいちゃんから聞いた話を忘れないために、今この文章を書いていく。若い人でも共感しやすいように、高校生のありのままの気持ちを添えて。

優秀賞

曾祖母と祖父が遺してくれたもの

島根県立三刀屋高等学校二年

武田眞奈

「では、今年の演目は『永井隆物語』で行きましょう。」

演劇部の亀尾先生の言葉が響いた。しかし、私は複雑な気持ちになった。一年間戦争という重いテーマと向き合うことになるからだ。大切な家族が亡くなるシーンは何度演じても胸を締めつけられるほど辛かった。

しかし、練習を重ね、永井博士の思いを知るうちに、新たな気付きがあった。悲しみの中でも生きることの素晴らしさ、永井隆博士の「隣人愛」や「家族愛」の言葉の意味だ。

そんな折、私は曾祖母を亡くした。いつも笑顔で私の登校を見送ってくれる優しい曾祖母だった。私は、人生で初めて家族を亡くす経験をした。突然のことで気持ちの整理もつかず、悲しみに包まれた。

その時、永井博士のことを考えた。永井博士は最愛の妻、緑さんを亡くし、言葉では表しきれないほどの深い悲しみに満ちていたはずなのに、苦しんでいる人たちの治療に当たった。そのことを思い、私もここで止まっている場合ではないと気持ちを切り替えた。曾祖母は、戦争のことは多くは語らなかったが、「元気が一番。何でも食べて大きくなるんだよ。」といつも家族のことを気遣い、愛してくれた曾祖母の優しい笑顔とぬくもりを思い出した。

そして再び「永井隆物語」と向き合い、自分の与えられた役に本気で取り組んだ。地区大会、県大会と勝ち抜くことができた。しかし、配役再発表の日。そこに私の名前はなかった。今まで練習を積み重ねてきたのに、何もかも無駄になった気分だった。結果は最優秀賞。全国大会への切符を皆とつかみ取った勝利だったが、自分に役がな

いという悲しみは消えずにいた。

年が明け、一年生が終わろうとしていた春、今度は祖父が亡くなった。病気療養中とはいえ、元気にしていた祖父だった。また一つ大きな悲しみが私の心に落とされた。祖父は私が挑戦しようとする、誰よりも応援してくれた。本当にかげがえのない祖父だった。

私は気持ちに不安定になり、体調を崩すことが増えた。自分がなぜ生きているのか、死んだらどうなるのだろうか考えた。今自分が一生懸命努力していることもどうせいつか死ぬのだから意味がないと思ってしまう。いろいろな悲しみが混ざり合い、今まで生きてきた中で一番苦しかった。

そんな時、再び永井博士の「愛し子よ、汝の近き者を己の如く愛すべし」という言葉が私の心に留まった。この言葉は練習で何度も言った言葉だが、その言葉に祖父たちの姿を重ねた。祖父たちとの思い出を振り返ってみると、孫である私にたくさんの愛情を注いでくれた。アルバムを見返すと、愛されて育ててくれたことへの感謝の気持ちがかみ上げてきた。それなのに、私は祖父と曾祖母に一体何を返せたのだろうか。叱られたときに黙って無視してしまったり、投げかけられた言葉に対して冷たい態度をとったりしたこともあった。そんな自分がなまじけなくなった。そんな自分を反省すると同時に、祖父たちが遺してくれた愛を私が今度は家族や周りの人に注いでいくことが使命ではないかと考えた。

それからは、演劇の練習でも心を込めてそのセリフが言えるようになった。自分がこうして演劇部の一員として「永井隆物語」を演じている意味も考え直すことができた。

平和の根源は、「愛」なのだと思う。一人一人がまずは周りにいる人たちを愛することが平和への第一歩なのだとすることを、祖父たちから、そして「永井隆物語」から学んだ。「死」は、本当に悲しいことで、受け止めることはできない。しかし、遺してくれた言葉や思いを引き継いでいくこと、周りの人への感謝の気持ちを行動に移していくことが、今の私の使命だと感じている。

佳作

隣人に向ける愛

島根県立平田高等学校二年

田中悠真

今年、私は生まれて十七回目の終戦の日を迎える。七十七年前、多くの戦没者が迎えたたくも迎えられなかった日だ。あるいは、数えきれない犠牲の上に来上がった日ともいえる。

太平洋戦争末期、旧日本軍は悪化する戦局の中で特攻作戦に一縷の望みをかけた。しかし、その結果は誰もが知る通り、ただ悪戯に若者を殺しただけに終わった。特攻作戦で戦死した最年少の兵士は、十七歳という若さで沖繩の空に散ったそうだ。私とほとんど変わらぬ歳の青年が、おかしな話だが、戦闘機に乗り込み、戦火に命を落としたのだ。

今の時代、インターネットのおかげで兵士たちが残した手紙や遺書は、簡単に読めるようになった。そこで、実際に彼らが最後に書いた手紙を何通か読んでみると、私は至極当然な結論に辿り着いた。それは、戦地にいても結局、最期の時に考えるのは家族のことであるとという事だ。

家族の元を離れて初めて送る手紙には、たしかに「御国のために」という様なことが多く書かれていたのだが、最期が迫るに連れて手紙の大部分が家族の今後や兄弟姉妹の健康を心配するものに変わっていくのだ。

私は彼らの手紙を読んでみて、彼らは家族を己以上に愛せたからこそ、家族の未来のための特攻、つまり自己犠牲と言う形での最高の愛情表現をする事ができたのではないかと感じた。国のためにとは言いつつも、やはり最後は家族に会いたいという思いが強まり、つい文面に出て来てしまった。そう考えれば最後まで御国一辺倒の

の隊員が少ないということにも、説明がつくように思うのだ。

ここで一度話を現代に移して、二〇二二年の四月二十四日から今日までの話をしたい。未だ終戦の糸口すら見えない、あのウクライナ侵攻の事だ。まさか、自分が生きている間に、これほどの戦争が起きるとは夢にも思わなかった。だが、開戦が伝えられた日以上の衝撃を感じた日が私には一度だけあった。その時は「これが戦争の真の恐ろしさなのだ」と痛感させられたのを覚えている。それはロシア海軍の巡洋艦が撃沈された時のことだ。

ロシア海軍の巡洋艦モスクワが沈没した事で、少なくとも二十名以上のロシア海兵が死亡したとされているが、その旨がニュースで報道された時、ネット上ではウクライナ軍を称賛する声や沈没したことを吉報だと言う様な声が見られた。二十人以上の人が命を落としたという、確かな事実があるにも関わらずだ。もし仮に、前線にいるウクライナ兵がその知らせを聞いたとしたら、確かにそれは吉報といっているのかもしれない。だが、戦場にいるわけでもない私達が、一体どうして、人が死んだ事実を吉報などと呼べるものだろうか。今、私には多くの人が戦争と愛の関係を忘れてる様に思えてならない。兵士たちが何を思って戦場にいるのか、それを忘れ去ろうとしているように思ってしまうのだ。そしてまた、戦争の傍観者である自分たちの役割すらも、忘れようとしているように思ってしまう。

戦争に直接参加していない私達には、かつての特攻兵たちの様な自己を犠牲にした愛情表現は出来ない。だがその代わり、いつかあの戦争が終わった時には、戦い抜いたウクライナ兵やロシア兵に対して侮蔑ではなく愛を持つこと、そして、世界に向けて「今こそ地球に生きる隣人に向けた、無償の愛を持つべきである」と発信していく事、これは今を生きる私たちにもできることであり、同時にしていくべき使命だと思う。

かつての様な、自己犠牲や誰かの犠牲を必要とする方法ではなく、今の時代に合った私たちだからこそできるやり方で、隣人を愛する事の大切さを広めていきたい。

佳作

平和への想い

島根県立三刀屋高等学校二年

長崎 帆乃花

「安倍晋三元首相が銃撃され死亡」画面に飛び込んできたその言葉に、しばしばかんとした。安倍さん海外にいたのかな？どうして？テロ？やっぱり海外は危険な事が多いんだな。遠い国の話のようにピンとこない。銃の規制が厳しく平和だと信じていた日本で、まさか元首相が銃撃されるなんて考えもしなかったからだ。

日本に比べて、海外では銃の所持が容易だ。韓国では実弾の射撃体験が出来る場所が観光スポットにもなっていて、日本人にも人気だ。日本では法規制が厳しく、ちよつと体験してみるという事も難しい。銃は少し格好良いイメージはあるが、私は怖いし触ってみたくもない。海外の銃乱射事件などを見るたびに、簡単に身の回りにあるような環境ではなくて本当に良かったと思ってしまう。だから安倍元首相が銃撃された場所が日本だとは思わなかったのだ。そして今回使用されたのは手作りの銃だと知ってさらに衝撃を受けた。銃なんて危険な物が一般人に手作りできるのか。インターネットで材料を購入できる。作り方は動画サイトで流れている。3Dプリンターの利用も出来る。・・・日本は本当に平和なのだろうか。銃の所持が容易か難しいかの問題だけではなく、ひとりひとりの認識次第で当たり前にある平和が崩れてしまうという事を実感してひやりとした。

安倍元首相が銃撃された事件はあつという間に全国ニュースの

トップ記事となり、海外でも大きく取り上げられた。麻生元首相は弔辞の中で「ことあるごとに安倍はなんと言っていると各国首脳が漏らした事に私は誇らしい気持ちを持った。」と話し、ロシアのプーチン大統領も「彼の記憶はいつまでも心に残るだろう。」と伝えた。日本中が安倍元首相の偉大さに改めて気づき悲しみ、海外でも突然の死を悼む声が溢れた。私も驚き悲しみながらもそれは当たり前前の光景だと感じていた。しかしそうではない人もいる事を知った。韓国では日韓関係が悪化したのは韓国を嫌う安倍元首相のせいだと主張し、容疑者を英雄扱いする人も多くいたのだ。全ての人が冥福を祈り悲しむものだとばかり考えていた私には信じられなかった。国が変われば信じていた価値観や常識が変わるといふ事を目の当たりにした。どうして戦争などという悲しい事が続いていくのかと今まで思っていたけれど。ああこういう事なのかもしれないと思った。

日本では原子爆弾が落ちて十四万人の人が亡くなり戦争が終わった。当時人々は悲しみ安堵し深く深く平和を祈っただろう。それから七十七年。戦争を経験している人も少なくなり、私たちは教科書や書籍、インターネットを通してしか知らない。経験した人から話を直接聞く機会もあまりない。平和への想いを実感出来ない私たちの現代社会は、本当にこれからも平和が続くのだろうか。平和とは何なのだろう。どうしたら平和を維持出来るのだろうか。当たり前にあると思ひ私は今まで考えた事もなかった。今回の銃撃事件が悲しみだけで終わらず、皆が考えていくきっかけになればよいと思う。平和とは法律だけでは作る事が出来ない。ひとりひとりの価値観や倫理観、偏らない知識によってつくられていくものだと私は今回の事件を通して知る事が出来た。平和の為に私が出来ることが何かはまだわからない。けれど普段から広い視野で物事をとらえ、相手の気持ちを尊重して人と接していく事で平和への想いを固めていきたい。

最優秀賞

平和の光

埼玉県

小松崎 有美
こまつざき ゆ み

今年二月衝撃的な映像が流れた。ロシアによるウクライナ侵攻。突如落とされたミサイルに人々は逃げ惑い、逃げる術を失った。現場には人体の一部やぬいぐるみが散乱する。

「なんかかわいそう」

一緒にその映像を見ていた息子も顔を歪める。それも無理はない。何せ同じ年くらいの子ども達が巻き込まれているのだ。日本もかつて戦争国であったことを話すと急に目の色が変わった。

「なんでせんそうをしたの」

「なんでばくだんをおとされたの」

「ちいさな『なぜ』はさらに続く。」

「なんでひろしまとながさきなの」

私は口をつぐんだ。こんな時実際に被爆地を訪問できたら戦争をもっとリアルに伝えることができるかもしれない。しかし今はコロナ禍だ。外出はおろか語り部さんとの接触も困難である。そんな時たまたまインターネットで『オンライン被爆体験講話』の存在を知った。被爆地を訪れることが難しい今、このような取り組みが各地で広がっているらしい。私も突き動かされるように息子と申し込みをした。

講演当日、画面に現れたのは十三歳の時広島で被爆したOさん

だった。OさんはB29から原子爆弾が投下された日、着のみ着のまま高台に避難した、しかし路上では火傷で皮膚が真っ黒になった人が、「水、水、水」としがみつき、倒れた家屋の下からは「助けてくれ、助けてくれ」という叫び声がしたと言う。橋の下では煤で汚れた少女が「お母ちゃん、助けて」と泣き叫び、叫んだ末に倒れ込んだ。皆が皆、血を流し、心で涙を流していた。

「あんな時代がもう一度あつてはならないがあんな不幸にあつた者だけが知る戦争の悲劇はいつまでも語り残していきたいんです。まあ私もそんなに長くないんですけどね」

Oさんはため息混じりに言った。それもそのはず。これまで月に一度実施していた被爆証言会もコロナ禍でできなくなり、その間仲間を三人失った。Oさんは「被爆者の高齢化は平和教育にとつて深刻な問題」と警鐘を鳴らす。

そんな被爆者たちの思いをつなごうと近隣の若者たちが『見聞きした被爆体験を伝え合う会』を発足した。皆が「おじいちゃん」や「ひいおばあさん」から聞いた被爆体験を披露する。こちらもオンラインだ。私たちが参加した日は長崎や沖縄、マレーシアなどから約四十人が顔を合わせた。中には通訳や手話を通じて参加する人もいた。講演の終盤、語り部の高校生が「原爆を受けたあと手足のヤケドからウジ虫がわいて、それを一匹一匹泣きながらとつたそうです」と話した。すると息子が「いたくてないたんですか」と尋ねた。途端に語り部の表情が固まった。彼は少し考えたあと、ためらいがちたつたひと言。「たぶん…」と答えた。結局戦争体験を継承する難しさはこういう所にあるのだろう。涙の理由はその人にしかわからない。

後日その事を被爆者のOさんに話すと彼女はこう言った。

「ウジ虫と聞くと汚いと思うでしょう。私からすれば違うのよ。もう泣きながら取りましたよ。痛いからじゃないの。なんでこんな目に遭わなきゃならないんだって！」

涙の理由は、痛みではなく、怒りだった。その怒りが反戦を訴え、平和を求める原動力になったのだろう。最近になってOさんは講和をオンラインに切り替え、精力的に署名活動もするようになった。

「今はもう足が悪くて外にも行けないでしょう。おまけにコロナよ。でもこうやってインターネットがあれば皆に、しかも世界に訴えられるじゃない」

Oさんは手元の記事を見せた。それは核兵器廃絶を求める署名活動のものだった。

「インターネットで呼びかけたら、ほら。こんなに。おかげで私たちは今も平和な日々を過ごすことができているのよ」

今や世界とつながることが可能なオンライン。多くの人が反戦を訴え、平和を求めた結果、核兵器禁止条約の署名国は八十六ヶ国に。今日の平和がこうした人々の努力の上にあることは間違いない。「愛の世界に敵はいない」と永井博士が言うように、国境を越え、文化の違いを越え、心でつながることができたら、きっと、平和は訪れる。「これからも戦争はしないでね」

Oさんが言うとき息子は強く頷いた。Oさんの目にはうつすら光るものがあった。

講演後オンラインで署名に挑んだ息子。名前を打ち込むちいさな指先に、平和の光が灯っているように見えた。

優秀賞

友だちと仲良くする意味

島根県

名な原はら志し穂ほ

私には九十一歳の祖母がいます。私は小さい頃から祖母が大好きです。一緒に公園に行って遊んだり、絵本を読み聞かせてもらった楽しい思い出がたくさんあります。しかし、私には不思議に思っていたことがあります。祖母は私に会う度に「友だちと仲良くしとる?」「友だちと仲良くせんといけんよ。」と言うのです。そんな当たり前のことなのに、どうして私に会う度にそんなことを言うのだろうかと思っていました。祖母の言葉の意味が分かったのは、大学生の時でした。祖母の言葉の背景には悲しい戦争体験がありました。

私の祖母は十四歳の時に広島で入市被爆をしています。一九四五年八月六日、広島に原子爆弾が投下された日、祖母は爆心地から三十五km離れた小さな町に住んでいました。当時、二人のお姉さんが広島市内に住んでいたので、原爆が投下された翌日、祖母はお母さんと一緒にお姉さんたちを探しに広島市に行きました。お姉さんたちを探す中で見た地獄のような広島の様子を、祖母は今も多くの人々に被爆体験講話という形で伝えていきます。

祖母は昔から、自分が子どもの頃の生活や戦争体験について比較的よく話してくれました。しかし、戦争体験は悲しい話です。幼い頃の私は戦争体験の話聞くのが嫌で、祖母の被爆体験をすっかり

と聞いたことがありませんでした。私は生まれてから高校を卒業するまで広島で過ごしたので、毎年のように平和学習があり、通学路には原爆ドームがありました。戦争や原爆が身近にあったため、自分が平和活動をする必要性を感じていませんでした。しかし、大学進学を機に広島を出て初めて八月六日の朝を迎えた時、気持ちに大きな変化がありました。広島は八月六日の朝は登校日であり、殆どのテレビ局が式典の中継をします。一年間の中でこの日だけはいつもと違う朝を迎えていました。しかし、県外で迎えた八月六日の朝はいつもと変わらぬ朝でした。八時十五分になっても何も無い。ただいつもと同じ時間が流れるだけでした。あつという間に八月六日の朝は終わっていきました。それがいけないという訳ではないのですが、こうやって戦争や原爆が遠い存在になり、忘れられていくのだろうかと不安な気持ちになりました。これではいけないという思いが強くなり、祖母にお願いをして講話を聴講させてもらうことにしました。

その日は、兵庫県から来た修学旅行団に講話をする日でした。肩から指先まで皮膚がめくれた人々のこと、人間とは思えない赤鬼のような死体を見たことなど、祖母は約一時間かけて広島の様状について話します。子どもたちも真剣な眼差しで聞いていました。

講話の最後に、「皆さんは友だちと仲良くしていますか?隣や周りにいる友だちと必ず仲良くしてくださいね。それが、平和な世界を守るために皆さん一人一人ができることです。」

この話を聞いて気がつきました。戦争は悲しみの連続です。初めは権力者同士の小さな言い争いから始まったかもしれませんが、それが周りを巻き込み、国家間の争いになり、武器を持ち、やがて戦争

になります。戦争が始まれば、必ず負傷者や死者が出ます。大切な人を亡くし生き残った者の心の中には、憎しみや悲しみが生まれ、復讐心へと変化し、再び戦争へと繋がります。だから祖母は、私が幼い頃から「友だちと仲良くせんといけんよ」と言い続けてきたのだと思います。自分の周りの人を大切にする、思いやりを持って相手に接することで、言い争いやいじめはなくなります。それが世界から戦争がなくなり、平和を守っていくことに繋がります。当たり前のように言われる「友だちと仲良くしよう」という言葉には、とても大切な意味が込められていることに気がつきました。

今年には戦後七十七周年を迎えます。高齢化が進み、日本にいる殆どの方が私も含めて戦争を経験したことがない世代になりました。日本は七十七年間戦争をしていませんが、ロシアによるウクライナ侵攻のように、世界には紛争やテロなどで苦しんでいる人はたくさんいます。最近では日本国内でも、先日の元首相銃撃事件のような不安な空気があります。歴史の一部だと思っていた過去の戦争が、少しずつ私たちに近づいてきている気がしています。こんな世の中だからこそ、日々何気なく耳にする「友だちと仲良くしよう」という言葉に込められた思いや願いを、皆で考える必要があると思います。私は祖母の被爆体験と祖母の言葉をこれからも多くの人に伝えるために、広島市の被爆体験伝承者になりました。平和な世界の実現に向けて、少しでも多くの人に「友だちと仲良くすること」の大切さを伝えていきたいです。

佳作

今、伝えよう

広島県

三村祐子

「海外アーティストのライブに当たったー」嬉々とする娘の声の向こうで、小さな国と大きな国の戦況を伝えるテレビの音。その横でサバイバルゲームに興じて夜更かしでもしたのだろうか。まだ眠た気にソファに転がっている息子。一つの空間で見える光景に違和感を感じつつも、私は戦場のゴミ当番だったことを思い出し、テレビを迷いなく切った。テレビは戦況の続きを言いた気に不機嫌に黙る。代わりに、平和って何？ 平和な暮らしとは？ 今の世界は平和なの、それとも？ 頭の中で、いろいろな問いがぐるぐる回り始めた。鳴き出した蝉の声に今抱いた思いがかき消されないように、ゴミ置き場まで急ぎ足になった。

戦争体験を語ってくれた祖母は、八年前に他界した。空襲の中、幼い二人の子供を連れての退避は大変だったことを話してくれた。一人は負ぶって、もう一人の手を引いてと。度重なる空襲警報に、あるとき面倒になり、防空壕に入らず、ふらふらしていたら、組長さんにひどく叱られてねと苦笑い。手を引かれていた子も八十歳を越えた。父からは、いつもおなかをすかせていた幼い思い出を聞く。そして、祖父のこと。終戦後、戦病死という形で亡くなった。隣の国を行き来する連絡船の船長だったと。戦況が激しくなると、神経をすり減らしながらの航行で、船長は船と運命を共にするという

覚悟の言葉があったこと祖母から教わった。

会うことがなかった祖父の写真を見るたびもっと知りたいという思いが強くなっていった。その頃、祖父が乗っていた連絡船の船史があることが分かり、図書館を通じて取り寄せることができた。

辿っていくと、祖父の船は昭和二十年の春機雷に接触し、航行不能となった。幸いにも直ちに修理され復帰できた。機雷とは、機械水雷の略だと初めて知った。海峡に散布された機雷のため航路の機能は麻痺状態となった。上は敵機、下は機雷。これが祖父の心労の正体かと慮る。祖父は何を思い、航行していたのだろうか。目に映る海は、耳にする波音は祖父の心を保ってくれただろうか。終戦を前に航路は実質休止とあった。悔しかっただろうか。それとも安堵したのだろうか。

「おじいちゃんは、何と言っていたの。」

遺影の祖母は、優しく微笑むだけ。

祖母の法事の折、叔母に尋ねた。父より幼かったから余計に記憶は朧げだろうと。意外にも床に伏せていた祖父の姿が残っていると聞いた。

「うつっちゃいけんって言われて、兄ちゃんと私は近くに寄れんかったんよ。」

と。ふいにその光景が浮かんできて、幼き二人の寂しい気持ちがいそがしく伝わってきた。

永井博士の「この子を残して」の一説に、子供は親にすがりつきたいものである。子供たちは医者のお父さんのそばへ寄ってはいけません」という言いつけをよく守り、そばへ寄りたいたい、じゃれつきたい、すがりつきたい、甘えたい想いをおさえ、いつも少し離れ

て私と話をする。私の方も、世の常の父親のように、この子を抱き上げたり、ひっくり返したりして押さえつけたり、くすぐったり、きやつきゃつ言わせて遊びたいと。

祖父もそうだったのか。いや、そうに違いない。使命を全うし命尽きようともし、子を愛おしく想う永井博士と祖父の姿が重なって見えた。しかし、それは戦争で引き裂かれた過去の家族の情景なのだろうか。己の欲のためには小さな命でさえ無関心を装う世の中であり続けるのなら、起こり得る未来の情景かもしれない。

今、できること。

私が受け取った祖父や祖母の思いをそのまま伝えよう。

幼き子らを遺して去った二人の父のことを。

尊き命の繋りで生かされていることを。

平和は当たり前ではなく、有り難いものだということ。

まずは、私の二人の子供に伝えよう。

今、伝えよう。

佳作

言葉の重み

福岡県

三宅隆吉

私には明治35年生まれの叔母がいた。

肌は雪のように白くさびしげな美しさをもつ人であった、叔母には一人息子の雅男がいた。終戦（昭和20年）間際に軍に召集され、ついに帰国することはなかった。

遺骨が返ってきた通夜の日、もの静かな叔母は、弔問に訪れた客の前では決して悲しい顔を見せなかった。

その日、当時6歳であった私は叔母の家に泊まった。眠ってから何時間くらい経ったであろうか、隣りの部屋から声が聞こえた。叔母が声を殺して泣いていた。「遺骨を抱いて泣いているのだ」私とはとっさにそう思った。最愛の一人息子を亡くし、声を殺して泣く叔母の姿が哀れであった。

私にも優しく一緒に遊んでくれた雅男の姿が目には浮かび、ひとりで涙が滲んできた。

翌日、葬儀の日の叔母はいつもの控え目な姿に戻っていた。私が帰宅する時、声をかけてくれた。「これは雅男が出征するまで大切にしていたものです。あなたが貰ってくると雅男も喜んでくれるでしょう。父さんと母さんには親孝行をしてね。元気で過ごすですよ」と言い一本の剣道の竹刀をことづけた。

雅男は剣道が得意であることは知っていた。雅男と私の姿がだぶつ

たのであろう、叔母の瞳にはうつすらと涙がにじんでいた。

幼かった私は、叔母の心境をよく理解できないでいた。この言葉がその後の人生を考えるきっかけとなった。その言葉は重かった。

今度の大戦で310万の日本人が亡くなった。叔母と同じ悲しみを味わっている人がいるということは年齢を重ねると共に、実感してきた。戦争はあつてはならない。私の義姉が長崎で爆風にさらされ、姉も学徒動員中に福岡で焼夷弾を浴び重傷をおった。その上互いに思いあつていた大切な人・婚約者を長崎の原爆で失った。

亡くなった本人もまた遺族の方々も叔母と同じように悲しい目に会われておられることを推測すると平和の大切さを思い心が痛む。

何か社会にお役にたてることはないか。考えた末、老人ホームと自宅で習字と篆刻（てんこく）の稽古の手伝いをしている。皆様が熱心に取り組んでおられる姿に接することは嬉しい。ホームでは稽古後、皆様と気楽に、世間話をするのも楽しみだ。

多くの高齢者はさりげなく生きておられる。いつもの散歩道で一輪の白いヒガン花を見かけて「気持ち温かくなった」とうれしそうに語った80代後半の女性などの話は心が和む。

戦後の混乱の中で日本の復興に寄与してこられた方達だ。口には出されないがご苦労が多かったと思う。今後も敬意をもって接していきたい。

高齢の皆様と接していて教えられることは多い。人は孤独だと寂しいし、心配ごとを抱えていけば、やすらげない。気持ちの持ち方ひとつで、やすらぐこともできる。

人生の旅路の果てにある、やすらぎの境地。それは幻影なのだろうか、この方達はそこに辿りつきたいと、明日に希望を託し、生き

ておられるように思う。尊敬に値する。

82歳の自分にできること、それは感染を予防し自分が健康であることが世の中に対する役割だと認識している。具体的には朝のラジオ体操、畑作業、軽い筋トレ等である。

自分で目標を立ててそれを実行することが豊かな福祉社会を創ることに通じると考える。

今、国にとり大事なことは、家庭教育だと思う。世間ではマナーがおろそかになり、家庭崩壊等による悲しい事件が増えたように感じる。子どもの教育と人間としての基本的ルールを教えるのは家庭の役割だと思う。

子供の習字教室では、字の上達よりも心の面を重視して指導している。2点だ。一つは明るい挨拶ができること。2点目は履物をきれいに揃えることである。実現するまでには時間がかかったが、今は私が言わないでも上級生が下級生を指導している。

82歳になった。何とか生きて来た。多くの方の温かい支えによるところが大きい。幸せな人生であったと感謝している。しかし、順風ばかりではなかった。辛い時もあった。その時私を支えてくれたのは、叔母から戴いた一本の竹刀とその時の言葉であった。戦死した雅男は20歳であった。幸せな家庭を築くことを夢み、剣道に精進していた。やりたいことも多くあったであろう。叶わず、南海の海で逝った。無念であったに違いない。我々に伝えたいこともあったはずだ。それは何だったのか。ふと思いにふけることがある。思い悩んだ少年期も昭和も遠くなった。叔母の平和を願った言葉と永井隆先生の「己の如く人を愛せよ」と説かれた言葉を胸に刻んでいる。残された人生を、人を愛し平和を願い誠実に丁寧生きて行きたい。

第32回 島根県雲南市永井隆平和賞 最終選考作品一覧ならびに結果

【小学生低学年の部】

杉本 梨々那	みんなとなかよくしたいな	島根県	雲南市立掛合小学校二年	最優秀賞
原 優育	やさしくなりたいな	島根県	雲南市立鍋山小学校一年	優秀賞
谷戸 歩羽	家ぞくっていいな	島根県	雲南市立鍋山小学校三年	佳作
菅澤 楽生	学校ってたのしいな	島根県	雲南市立鍋山小学校二年	
名原 紗月	金メダル	島根県	雲南市立鍋山小学校二年	
別所 幸樹	チャレンジする「つよい心」	島根県	雲南市立鍋山小学校二年	

【小学生高学年の部】

小林 綾花	今、自分にできること	島根県	雲南市立鍋山小学校六年	最優秀賞
黒木 太陽	永井隆先生に誓う平和	東京都	目黒区立田道小学校四年	優秀賞
村尾 和奏	木次の桜と永井千本桜	島根県	雲南市立木次小学校六年	佳作
須山 灯里	けんかって、いいな	島根県	雲南市立掛合小学校五年	佳作
小畑 瑞姫	平和な世界を目指して	島根県	雲南市立三刀屋小学校五年	
青木 四葉	平和な世界を願って	島根県	雲南市立大東小学校六年	
高橋 勇次	ぼくが実行したいこと	島根県	雲南市立斐伊小学校六年	
難波 真悠子	以愛接人を受けついで	島根県	雲南市立木次小学校六年	
渡部 璃音	当たり前であることへの感謝	島根県	雲南市立掛合小学校六年	
山本 愛那	言葉の大切さ	島根県	雲南市立阿用小学校六年	

【中学生の部】

日野 由唯	被爆者の苦しみを原点に	広島県	盈進学園盈進中学校三年	最優秀賞
濱元 優愛	私の平和宣誓書	沖縄県	糸満市立高嶺中学校三年	優秀賞
梶谷 由奈	神風特攻から考えたこと	島根県	雲南市立加茂中学校一年	佳作
黒木 大誠	忘却	東京都	東京大学教育学部附属中等教育学校二年	佳作
菅野 ころろ	「平和のつくりかた」	大阪府	大阪女学院中学校三年	佳作
谷戸 誉	命をつなぐ	島根県	雲南市立三刀屋中学校二年	

井上ユイ	核兵器のない世界へ	大阪府	大阪女学院中学校三年	
山内玲奈	平和のつなぎ手	沖縄県	糸満市立兼城中学校三年	

【高校生の部】

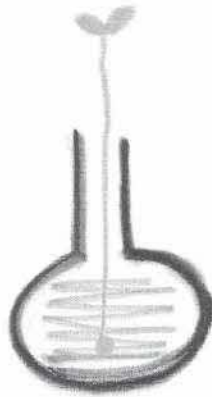
山本彩世	こちらは台湾放送局です	島根県	島根県立松江北高等学校三年	最優秀賞
武田真奈	曾祖母と祖父が遺してくれたもの	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	優秀賞
田中悠真	隣人に向ける愛	島根県	島根県立平田高等学校二年	佳作
長崎帆乃花	平和への想い	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	佳作
加藤大成	平和と武器	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
島袋姫芽	恒久の平和を願って	沖縄県	KBC学園未来高等学校二年	
新藤寧	平和の愛し方	島根県	島根県立三刀屋高等学校二年	
山中彩也花	先人たちの“希望”となるために	広島県	盈進学園盈進高等学校二年	
古謝翔	沖縄戦を学んで思うこと	沖縄県	KBC学園未来高等学校三年	
山根麻由美	平和について、私たちにできること	島根県	出雲北陵高等学校三年	

【一般の部】

小松崎有美	平和の光	埼玉県		最優秀賞
名原志穂	友だちと仲良くする意味	島根県		優秀賞
三村祐子	今、伝えよう	広島県		佳作
三宅隆吉	言葉の重み	福岡県		佳作
大島悟	次世代に受け継ぐべき平和の礎	島根県		
幸田拓也	「未見の家族と紡ぐ愛」	福岡県		
白井明子	命の讃歌	北海道		
菅沼博子	母から受け継いだもの	愛知県		
正木万智子	一人一人の心の平和を願う	山口県		



NO



YES

KU
2007. 8. 26